

記憶の原理

記憶の原理に、「関心」とか、「興味」とかいうことばがよくあげられています。記憶術という名の本には、かならずといってよいほど、よく使われることばです。

物覚えが悪いといわれる人でも、自分が関心をもつこと、興味をもつことには、なかなかの記憶力を発揮するものです。どうも社会科がにが手だという人は、きっと社会的な事件に無関心な人です。つまり、関心や興味のあることはよく覚えられ、関心も興味もないことはよく覚えられない、ということになります。これをさらに掘り下げて考えてみますと、先に述べた「記憶するときの心がまえ」ということに帰着すると思います。

関心や興味のあることがらについては、しぜん「記憶体制」が整えられるということです。これはきわめて最近の研究によるものですが、記憶は、意志によって行なわれるものと、意志に関係なく行なわれる

ものとがあって、長期の記憶は、後者によって行なわれるものだというのです。だから、「覚えよう」という意志を働かせて行なった記憶は、短期の記憶に属するものであるが、そののち(たいていは一時間以内に起こる)、頭の中の「記憶体制」がこれを整理して、あるものは長期の記憶に移したり、あるものはこれを完全にわすれさる、という仕事を行なっているというのです。

つまり、わたしたちの頭の中で、わたしたちの意志を離れた「記憶体制」が、「これは覚えてやれ」「これはわすれてやれ」「これは一生だ」「これは一週間だ」と、えり分けている、というのです。